

モデル事業名	“牛鬼の里 うわじま” 消えない集落づくり事業
活動団体名	うわじま虹色ツーリズム協議会
ホームページ	http://ohira-marutagoya.blogspot.com/
所属/ 担当者名	ご担当者氏名（お問合せ先）：うわじま虹色ツーリズム協議会事務局 宇和島市商工観光課 大塚 志織
連絡先	電話番号 0895-24-1111（内線2738）、Eメールアドレス otsuka-shiori@city.uwajima.lg.jp
活動地域	愛媛県宇和島市

● 活動地域の概要

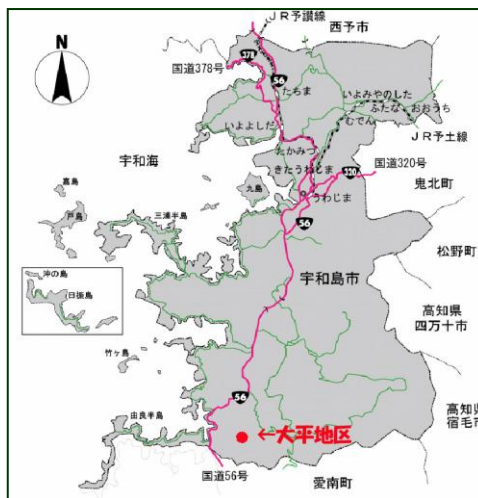
【愛媛県宇和島市】

- ・集落数 489集落（うち限界集落 28集落 今後10年以内消滅危惧集落 7集落）
- ・人口の推移 S55（ピーク時）110,920人 → H21（3月現在）88,476人
約30年間で、20%減少
- ・高齢化率 H21（3月現在）29.9%
- ・年齢別人口構成の推移

	年少人口 (%)	生産人口 (%)	高齢人口
H17(合併時)	11,875(12.8)	54,869(59.3)	25,741(27.8)
H21(3月現在)	10,787(12.2)	51,241(57.9)	26,448(29.9)

- ・公共交通に関する状況
 四国横断自動車道直近 西予市宇和IC
 民間路線バス 38路線（朝夕中心の時刻表） 広域路線14本 市内路線24本
 コミュニティバス 7路線 89.24キロ運行
 鉄道路線 予讃本線特急 一日16本 予土線 一日13本
- ・雇用の状況 有効求人倍率 H21（2月現在）0.47 ※愛媛県 0.82

【位置図】



【荒廃が進む家主不明の空き家と耕作放棄地】



● 活動地域の課題

- 1 少子高齢化、人口流出によるあらゆる分野での担い手不足
- 2 第一次産業の疲弊と雇用低迷
- 3 耕作放棄地、空き家、水利等の問題に対応する集落機能の弱体化

● 活動の内容

- ・平成20年度
 - 1 「地域調査」
限界集落「大平」をモデルとし、集落の暮らしや風習などの掘り起こしと記録作業
 - 2 「拠点（丸太小屋）づくり」
限界集落の現状を把握し、拠点づくりのための人材を招聘。
 - 3 「仕組みづくり」
集落の住民が減っていく中でも、集落機能を維持していくための仕組みづくり
- ・平成21年度
 - 1 「集落調査と記録収集」
平成20年度記録の補完と、離村者を含む土地管理を含めた集落の記録調査と収集。
 - 2 「血縁者や支援者にターゲットを絞った都市農村交流」
集落の財産を引き継ぐ予定の血縁者や住民にゆかりのある人材を招き、都市農村交流を実施
 - 3 「丸太小屋大作戦の実行と「新たな公」組織の法人化」
歩きへんろの休憩所および接待所としての機能を有する拠点「丸太小屋」を間伐材で製作にかかる。広がり行く支援者を巻き込み、「新たな公」組織の法人化を実施。

● 活動の成果

- ・平成20年度
 - 1 「地域調査」
これまで正式記録がないモデル集落「大平」の記録がある程度の形として完成した。
 - 2 「拠点（丸太小屋）づくり」
拠点づくりのための人材として4人の都市の若者を期間限定移住を実施。
 - 3 「仕組みづくり」
集落機能を維持していくための支援者の輪が拡大した。

半ばあきらめていた集落維持のための機運が高まるとともに、ブログなどの情報を通じて、他出者や支援者の関心が徐々に集まるようになった。



ほごろ作りの技術を記録



人材招聘の情報をHP掲載



地元まちづくり団体等との懇談

・平成21年度

1 「集落調査と記録収集」

昨年度記録として調査できなかった上半期の農業の様子や今後重要となる土地家屋の所有者情報などが、着実に記録できている。

2 「血縁者や支援者にターゲットを絞った都市農村交流」

盆踊りの復活（40年ぶり）やお亥の子さまの風習復活（30年ぶり）などを仕掛けながら、他出者や支援者が確実に現地で集う仕掛けを実践している。

3 「丸太小屋大作戦の実行と「新たな公」組織の法人化」

拠点としての「丸太小屋」の建設予定地を整地し、作図が完成。作業および資材の確認とあわせて、資金調達を実施。

4人の都市からの若者についてマスコミ取材などもあり、市全域に取り組みの様子が理解されるようになった。これまでの取り組みの様子や記録収集についての情報の問い合わせも来るようになり、モデル地域だけの事業から、少しずつ周辺地域住民の意識の向上につながってきつつある。



他出者調査で確認41年間分の日記



40年ぶりに盆踊りの復活



NHK松山による取材活動の様子

● 今後の課題及び展望

・課題

1 地域特有の事情によるコミュニケーションの難しさ

地域の行事を復活する試みの中で、現在も居住している「住民」と既に他出もしくは、他出しているながらも通い農業などを行っている「他地域に居住する住民」との間に、遠慮しあっている様子が見えるようになった。

そのため、全員が一つの組織の中、一枚岩となり、全ての問題を解決していくのではなく、住民組織と住民支援組織が、うまくお互いの役割を理解しながら分担しあえるようなスタイルが、当該集落では一番自然と思われ、当初想定していた仕組みと組織づくりを、実効性がある形にゆっくり整えていくことが課題。

2 重たい話題を話し合うつらさ

限界集落を考える上では、どうしても家族の話し合いと集落の話し合いが不可欠となる。住人自身、そのことを理解しつつも、いざとなると重い話題をさげがちになるため、しっかり側面から、話し合いの場を作り出すきっかけを繰り返し作っていく必要がある。

反面、土地家屋の継承や売買については、理性で割り切れないことも多く、性急に結論を急いで、のちのち後悔するようなことにならないよう、慎重に見守る必要がある。

・展望

1 耕作放棄地ならびに空き家の管理とあっせんのための仕組みを確立させ、土地の荒廃を防ぐとともに、人材を確保

2 へんろ休憩所兼都市農村交流拠点として丸太小屋が建設され、復活した地域行事の恒例化を進めながら、集落の出身者が集まりあえる機会を少しずつ増やす。

3 他地域へ波及させるためのスキルを公開し、限界集落を支援する中間支援組織の設立を目指す。